★とちぎの和牛を考える会・発起人　神長恒夫さんが地元紙・下野新聞に掲載されました。

神長恒夫さんは「とちぎの和牛を考える会」の立ち上げに尽力し、栃木の和牛界に新風を吹きこみました。
特に受精卵の活用においては栃木県内のみならず全国に影響を与え、和牛繁殖農家のパイオニアとして
さらに飛躍しようとばく進しています。

神長さんの更なる活躍を願う　と共に
全国の和牛関係者が、コロナに打ち勝って優良資質牛の輩出に頑張りましょう!!

下野新聞
2021年（令和3年）1月12日（火曜日）

今年の主役と共に歩む

牛に注ぐ情熱、愛情

技術究める「異端」

塩谷 神長さん

2021年、丑年が始まった。本県は生乳生産量が全国2位で、肉牛の飼養頭数も上位に食い込む。重要産業を支えるのは、多くの畜産農家の努力。高い技術で肉牛を育てるベテラン、子育てしながら乳牛に向き合う女性酪農家、今年も牛に情熱と愛情を注ぎ続ける2人を紹介する。（藤井達哉）

質の高い肉牛を追い求める神長さん＝塩谷町上平

「牛を飼っていると思うだろ。俺は飼われている。牛が全てを教えてくれる」

「神長ファーム」（塩谷町上平）の神長恒夫さん（75）は、長男の俊行さん（48）とともに肉牛の繁殖、肥育を手掛ける。育てた牛の大半が、A5ランクのとちぎ和牛となる。高い技術は折り紙付きだ。

約40年前に本格的に始めた。矢板市の獣医師　さん（75）の指導を受け、和牛の受精卵を乳用牛に移植し、生産する「借り腹方式」を全国でも先駆的に導入。角を取り除いた育成法など、先進的な試みを次々取り入れた。新しい手法は反感も買ったが「見てろよ、10年後は俺の勝ちだ」と奮い立った。

数年前からは、近親交配の度合いを示す「近交係数」の理論を用いて、血統や交配を考え抜き、高品質な牛を追い求め続けている。

自らを「異端児」と称するが、全国に出向き、多くの人に教えを請い、今がある。「1人の力なんて微々たるもの。周りの人や仲間を大切にしなくちゃ」と強調する。発足に尽力した勉強会「とちぎの和牛を考える会」は30年以上続く。

高校生と中学生の孫も、背中を追ってくれている。

「まだまだやめられない。これからは世界。日本のいい肉を世界に売るんだ」